

—歴史に学ぶ・ひろしまの過去から未来へ—

大型円墳の時代・宮の本第 24 号古墳

財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室主任調査研究員

梅 本 健 治

- 1 はじめに(2頁)
- 2 大型円墳・宮の本第 24 号古墳の調査成果 (2～4 頁)
- 3 宮の本第 24 号古墳の位置づけ (4～5 頁)

《図・表》

- ・宮の本第 20～26・31・32 号古墳墳丘測量図 (1:200) (6 頁・折込み)
- ・宮の本第 20～26・31・32 号古墳一覧表 (7 頁・折込み)
- ・宮の本第 24 号古墳の墳丘模式図 (8 頁)
- ・宮の本第 24 号古墳の墳丘盛土模式図 (8 頁)
- ・古墳墳頂における葬送儀礼のようす (想像図) (9 頁)
- ・葺石の種類とその消長 (10 頁)
- ・墳丘構築法の模式図 (11 頁)
- ・西日本的工法の県内例 (1:120) (11 頁)
- ・円筒埴輪の部分名称 (12 頁)
- ・宮の本第 24 号古墳の埴輪列と葺石 (13 頁)
- ・県北 (三次・庄原市域) の埴輪樹立古墳の広がり (1:20 万) (14 頁)
- ・文献表 (15 頁)
- ・広島県北の主な前・中期大型古墳 (三次・庄原市域中心) (16 頁・折込み)
- ・宮の本第 20～26・31・32 号古墳における墓制の変遷 (17 頁)

1 はじめに(調査に至る経緯・古墳群の概要)

宮の本第24号古墳は三次市北東部の向江田町の丘陵上にある径30mの大型円墳で、平成19(2007)年4~12月に(財)広島県教育事業団が中国横断自動車道尾道松江線の建設に伴って発掘調査を行った。第24号古墳の周囲には径10m程度の小円墳が取り巻いており、これらは箱式石棺を中心埋葬とする4基(第21~23・25号古墳)と横穴式石室をもつ3基(第20・31・32号古墳)から成る。其々の古墳の時期は、箱式石棺をもつ小円墳が4世紀末~5世紀中葉頃、横穴式石室墳が6世紀末~7世紀中葉頃とみられる。このほか、古墳群に先行する木棺墓(SK2, 3世紀末~4世紀前半)や祖先祭祀に関わるとみられる建物跡2棟(SB2・3)がみつまっている。

2 大型円墳・宮の本第24号古墳の調査成果

①墳丘の構造と盛土の構築 第24号古墳は調査区の中央、高所側に築造されている。三段築成の大型円墳で、径29.8m×31.0m、高さ3.72~4.69mの墳丘規模である。地面を高さ1mほど削り出した墳丘基底面(下段平坦面)の上に盛土(3段階)しており、第1段階の盛土の上面に最初の、そして古墳築造の契機となった首長の遺骸を納めるための縦穴式石室を第2段階の盛土と併行して築く。その縦穴式石室上面すなわち第2段階の盛土の上面(上段平坦面)から縦穴式石室の南北両側に墓坑2基を掘り込んで、大小の箱式石棺を築く。そして、最後にこれら3基の中心埋葬を覆うように盛土をして高さ1mの墳頂壇を築く。

②葺石 上段平坦面と下段平坦面間の墳丘斜面には葺石を施している。基底に20~50cmと大型の角礫を縦長に置き、その上方に10~30cmの大きさの小型の礫を乱雑に置く。廣瀬覚氏分類のB2類の葺石の積み方に該当する。

③埴輪

(1) 埴輪列 下段平坦面には円筒埴輪92本を樹立する。墳丘南東部で何か所か欠失がみられるので、本来は100本程度の埴輪が樹立していたと思われる。埴輪列の主体は普通円筒埴輪だが、約2割、20本程度は口縁が大きく2段に開く朝顔形円筒埴輪で、一定の間隔をおいて普通円筒埴輪の間に樹立されていたと思われる。埴輪は幅1.5~2mの平坦面の外縁寄りにはほぼ等間隔に立てられている。葺石の間からも夥しい量の埴輪の破片が出土していることから、墳頂壇周囲の上段平坦面や墳頂壇頂部にも埴輪列が存在していた可能性がある。墳頂壇頂部や周辺からは家形埴輪を主体とする形象埴輪片が一定数出土しており、3基の中心埋葬の周辺に置かれていた可能性が高い。埴輪列の埴輪を仔細にみると、5、6本を一つの単位にし、並びに微妙にズレがみられる。埴輪の間隔は中心間で60~70cm程度、埴輪間で30cmほどである。

(2) 埴輪の特徴

a. 法量 普通円筒埴輪(平均値)は底径28cm、口径38cmが平均値で、高さについては明確ではないものの、66~77cmくらいかと考える。朝顔形円筒埴輪はこの普通円筒埴輪よりやや大きく、平均値で底径28cm、口径46cmである。また、底部高(平均)15.6cm、突帯間隔(平均)11.3cm、口縁部高(平均)11.5cmで、 $\text{底部高} \div 1.39 = \text{突帯間隔}$ 、 $\text{突帯間隔} \div \text{口縁部高}$ で、廣瀬覚氏分類のⅡD型式(Ⅱ-4期)である。

b. 透孔 円形が中心だが、正方形に近い横長の長方形や半円、▽も少数だが存在する。

1段に2個が主体だが、長方形透孔を4個もつものや、円形透孔を3個配する例もある。

c. 調整 器表の調整は1次調整の縦ハケ主体で、2次調整の横ハケは部分的にみられるだけである。

d. 黒斑 いずれも有黒斑で、野焼きによっている。

(3) 埴輪の配置と“葬送の道” 埴輪列は基本的に1列だが、墳丘西側中央に1か所2列になるところがある。この部分の4本の埴輪はいずれも朝顔形円筒埴輪の可能性があり、そのうち南東側の埴輪は胎土が橙褐色の“赤い埴輪”である。この埴輪列が2列になる箇所東側の墳丘斜面は長さ6mにわたって基底石以外の葺石が存在しない。この葺石のない墳丘斜面を東に登りつめると墳頂の3基の中心埋葬の足元に辿りつく。この東西方向の通路状の部分を西に行くと尾根線を下り、第24号古墳に眠る首長の政治的拠点が存在すると考えられる向江田の平野部に行き着く。このことから、この第24号古墳の墳頂に延びる東西ルートは首長の遺骸を古墳の頂に運ぶ“葬送の道”として機能したのではないかと考えられる。この想定を補強するかのように、“葬送の道”の入口的な4本の埴輪のすぐ南側には埴輪片を挿入した小型の石棺(SK24-4)が存在する。更に、南東部の“赤い埴輪”と対応するように墳丘反対側の東側中央にも“赤い埴輪”と“黒い埴輪”が1本ずつ立てられている。また、この東西方向の“赤い埴輪”のラインに直交するかのように、墳丘北側中央には長方形透孔をもつ埴輪が2本立っており、南側中央には祭祀的意味合いの強い滑石製の双孔円板を内部に納めた円筒埴輪が存在する。この墳丘を東西南北に十字に切るように立てられた特徴的な円筒埴輪の有り様は、宮の本第24号古墳の墳丘における祭祀的色合いを窺わせる。

④埋葬施設

(1) 中心埋葬 墳頂部には3基の中心埋葬が築かれている。その中央にある竪穴式石室(SK24-1)が最初に築かれ、次いで北側の大型箱式石棺(SK24-2)、最後に南側の箱式石棺(SK24-3)が構築されたとみられる。この竪穴式石室に葬られた人物のために第24号古墳は築造されており、箱式石棺の2名の被葬者は竪穴式石室に眠る首長の血縁者(“キョウダイ”)とみられる。竪穴式石室の大きさは長さ3.53mを測るが、後世の盗掘を受けているため、副葬品は皆無である。大型箱式石棺は長さ3.15~3.23mと長大なもので、両側石は石材を立て並べているが、足元の西側小口は石室状に石材を5~6段積み上げている。また、頭位側の東小口には石材が全く存在しない。この大型箱式石棺の内部には数cm大の円礫による礫槨があり、そのなかに遺骸を埋納した箱形木棺が納められていたと思われる。この石棺の礫槨内から径5.9cmの小型珠文鏡が出土している。大型箱式石棺に葬られた人物は、竪穴式石室に葬られた首長と強い紐帯で結ばれた血縁者であったであろうことは、その埋葬施設の大きさが首長の墓のそれに匹敵し、埋葬施設の構造が箱式石棺と竪穴式石室の折衷的なものであることなどから窺い知ることができる。南側の箱式石棺は盗掘による損壊が顕著であるが、長さ1.8m程度の普通の規模の箱式石棺とみられる。攪乱土から鉄剣や鉄鏃の小片が出土している。

(2) 従属葬—埴輪片を挿入した石棺 第24号古墳の西側から南側にかけての墳丘裾には長さ1mにみえない小型の埋葬施設(石蓋土坑・箱式石棺・木蓋土坑)9基が築かれているが、なかでも下段平坦面西側の埴輪列に接するように築かれた小型の箱式石棺(SK24-4)が目される。1個体分の円筒埴輪の破片を石棺の石材の間に詰めており、第

24号古墳に樹立された埴輪の製作や祭祀に関わった人物の墓である可能性がある。石棺の間に挿入されていた埴輪片は3条4段以上の普通円筒埴輪（口縁～胴部で、底部は欠失）に復元できる。一段に長方形の透孔4個を放射状に配置しており、ほかの多くの円筒埴輪が円形透孔2個を配するのと異なり、I期的なより古い様相を示している。

⑤古墳の築造された年代 この第24号古墳の築造年代は樹立された埴輪の年代（Ⅱ期新相、廣瀬寛「前期古墳の埴輪」『シンポジウム記録8 前期古墳の変化と画期／古墳時代集落研究の再検討』考古学研究会 2012年）から4世紀末を中心とした時期が考えられるが、中心埋葬の副葬品がほぼ皆無であることや、土器類の出土が殆どみられないことなどから詳細な年代を明示するのは難しい。ただ、埴輪が樹立されるのは一般的には墳丘が完成し、埋葬祭祀が終了した後と考えられている（近藤義郎「隆起斜道と葺石・埴輪の配置」『前方後円墳観察への招待』青木書店 2000年）ことから、少なくとも宮の本第24号古墳の墳丘完成は4世紀末頃と考えることができる。しかし、古墳の築造の開始や中心埋葬のそれぞれの埋葬時期については、寿墓や殯葬のことを考え合わせれば即断はできない。古墳はその築造に膨大な時間を要することもあり、一般的には被葬者の生前から造り始められた寿墓（寿陵）であると考えられている。また、首長の死後、一定のモガリ＝「殯」（本埋葬までの一定期間遺骸を別処に安置あるいは仮埋葬し、その間遺族や近親者は儀礼を尽くして奉仕する我が国古来の葬制で、『隋書』東夷伝倭国条によると、7世紀初頭の日本では貴人の場合で3年間殯されたという。和田萃「殯の基礎的考察」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上 塙書房 1995年）の期間があることから、古墳の築造・埋葬に多くの時間を要したと考えられる。よって、宮の本第24号古墳の築造開始は4世紀末から遡り、4世紀後葉のかなり長い時間のなかで捉える必要があると考えられる。因みに、本古墳の土量はおよそ1,600 m³ほどだが、その900倍の土量の仁徳陵の築造には1日あたり2,000人が月あたり25日働いて15年と8か月かかるという試算があるが、これを宮の本第24号古墳に単純に当てはめると、1日200人が月25日働いて2、3か月～数か月で墳丘は完成することになる。

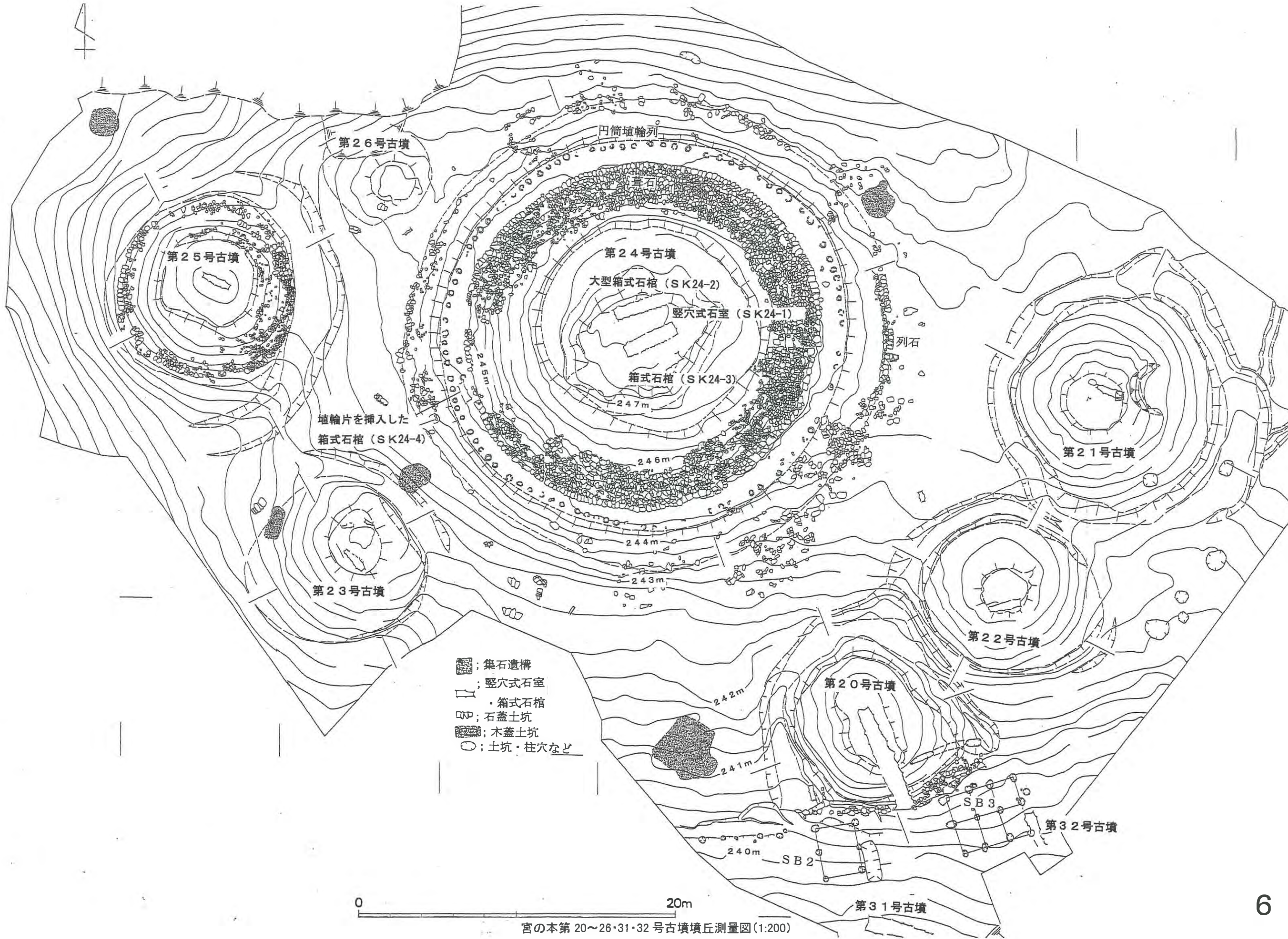
3 宮の本第24号古墳の位置づけ

墳頂中央の竪穴式石室に葬られた人物の死が宮の本第24号古墳築造の契機となったことは疑いない。この人物が生存し、活躍した時期はその死が4世紀末に近いことから、4世紀後半を中心とした時代であると考えられる。

宮の本第24号古墳が築かれたのは4世紀後葉。抑々、この古墳時代が始まって最初の150年間（古墳時代前期＝3世紀後半～4世紀末）の三次・庄原地域の古墳は今のところそれほど多くはみつかっていない。当地域の古墳の大半は次代の5世紀を中心に古墳時代中・後期に築かれている。宮の本第24号古墳の墳頂中央の竪穴式石室に埋葬された人物が活躍し、その死後墓が築かれた4世紀後葉を中心とした時期の古墳としては、4世紀中葉の庄原市東城町の大迫山（おおさこやま）第1号古墳、少し遅れて4世紀後半に築かれた神石高原町の辰の口（たつのくち）古墳、そして同じく安芸高田市の甲立（こうだち）古墳がある。いずれも宮の本第24号古墳に比べるとかなり大型の前方後円形の古墳（辰の口古墳が全長77mで県内第2位、甲立古墳は全長75mと同じく第3位の大きさ）である。これら3基の大型の前期古墳は、いずれも三次・庄原地域の中心からみれ

ば縁辺の地に築造されている。その一方で、三次盆地や庄原盆地の中心付近にはなぜか明確な前期の大型古墳は今のところみつからない。大迫山第1号古墳では埴輪は出土していないが、辰の口古墳や甲立古墳では円筒埴輪が墳丘頂部に樹立されている。いずれも最初期のⅠ期（3世紀後葉～4世紀中頃）の円筒埴輪である。宮の本第24号古墳の円筒埴輪はⅡ-4期（4世紀末）の埴輪であることが、その形や埴輪の器壁などに残された特徴から明らかである。ただ、辰の口古墳・甲立古墳の円筒埴輪と宮の本第24号古墳の円筒埴輪には明らかな違いがある。埴輪そのものの形態や諸特徴が前者、つまりⅠ期の埴輪は埴輪間、あるいは古墳間で同じ時期の円筒埴輪でも個体差が大きい。つまり個性が強い。それに対して、Ⅱ期でもⅢ期に近い宮の本第24号古墳の円筒埴輪は個体差が少なく、個性が弱い。つまり、よく言えば整った、完成された形状や属性をもっているといえる。また、埴輪の立て方も前者のうち、辰の口古墳は後円部の頂に少量立てられた状況で、とても埴輪列と言えそうにない。また、甲立古墳は後円部頂部に埋葬施設を囲むように円形に並んでおり、埴輪列としてかなり洗練された並び方をみせているが、埴輪列の主役であるべき普通円筒埴輪とほぼ同数の楕円筒埴輪が不均等に立て並べられており、まだ埴輪列による祭式は完成の域に達していない。これら2基の前期古墳の埴輪及び埴輪列に比べて、中期初頭で埴輪編年Ⅱ期末の宮の本第24号古墳の埴輪列はどうだろうか。宮の本第24号古墳の埴輪列は、普通円筒埴輪を主体にしたもので、一定の間隔で朝顔形円筒埴輪が配されていたと思われる。普通円筒埴輪は5、6本を単位に立てられていた。また、樹立された円筒埴輪も個体差が少なく、並びも整然としており、一定の埴輪祭式に基づいて配置されたものと考えられる。処で、埴輪には1段おきに透孔があり、Ⅰ期には△、□、半円、巴形など多様な透孔がみられるが、Ⅱ期以後円形透孔に統一されるようになる。また、一段あたりの透孔の数もⅠ期には3～4個あるが、Ⅱ期以降2個に統一されるようになる。器壁の調整も、1次調整の縦ハケののちに2次調整の横ハケを丁寧に施すようになるのがⅢ期以降である。そのほか、突帯が扁平で突出するシャープなものから、断面台形で幅広の分厚いものになる。そして、何より最下段の突帯までの高さが少しずつ短くなり、上方の突帯間隔や口縁部から最上段の突帯までの高さ（口縁部高）とほぼ等しくなる。そして、応神陵や仁徳陵などの巨大古墳の築造が始まるⅣ期には大量の円筒埴輪を短期間に製作・焼成する必要から、器表面の調整は横ハケ主体となると共に、埴輪焼成もそれまでの野焼きから窖窯焼成に変換されるようになり、それに伴って器表面にみられた黒斑はみられなくなる。これらの埴輪の形態や表面にみられる諸特徴の変化は、Ⅱ・Ⅲ期、つまり4世紀後半～5世紀初頭頃に相次いでおこる。宮の本第24号古墳はこのような円筒埴輪の変革期に、三次・庄原中枢域で最初にヤマト王権の埴輪祭式に則った大型円墳として築かれたのである。そして、Ⅱ期以後、Ⅲ期の埴輪を樹立した可能性のある古墳として、宮の本第24号古墳と馬洗川を挟んだ南側対岸に浄楽寺第12号古墳、やや奥まった美波羅川西岸の糸井大塚古墳が築造される。そして、Ⅳ期の埴輪を立て並べていたとみられる古墳は馬洗川南岸を中心に西は可愛川との合流点に近い酒屋高塚古墳、東は吉舎の三玉（みたま）大塚古墳、そして和知町・上大縄（かみおおなわ）古墳、三良坂町の岡田山第4号古墳がある。このように、Ⅲ期からⅣ期のほぼ5世紀代に馬洗川沿いに埴輪樹立古墳が急激に広がる様子が窺え、その起点として宮の本第24号古墳を捉えることができる。

《メモ》



第26号古墳

第25号古墳

第24号古墳

大型箱式石棺 (SK24-2)

竪穴式石室 (SK24-1)

箱式石棺 (SK24-3)

埴輪片を挿入した
箱式石棺 (SK24-4)

第23号古墳

第21号古墳

第22号古墳

第20号古墳

第32号古墳

第31号古墳

- : 集石遺構
- : 竪穴式石室
- ▭: 箱式石棺
- ◻: 石蓋土坑
- ◻: 木蓋土坑
- : 土坑・柱穴など

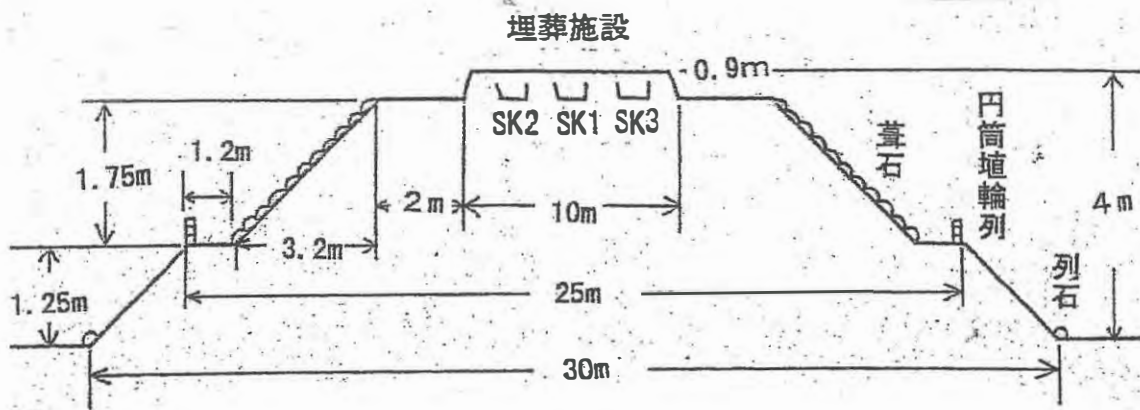
0 20m

宮の本第20~26・31・32号古墳墳丘測量図(1:200)

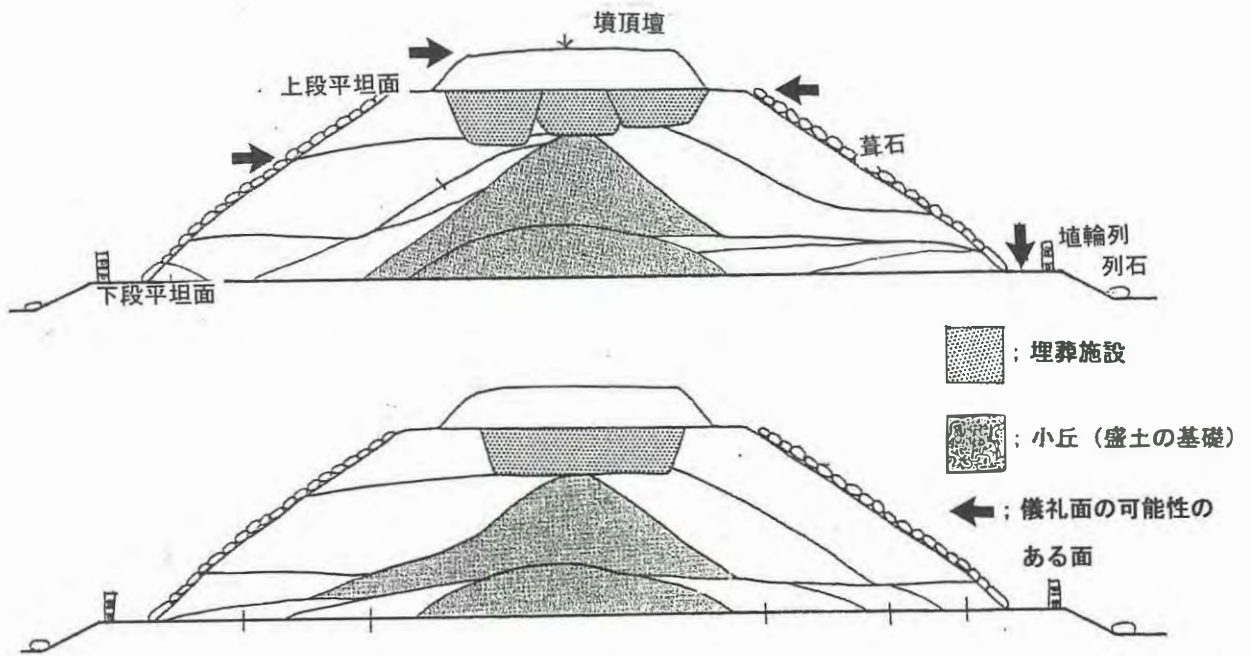
宮の本第20~26・31・32号古墳一覧表

古墳No.	墳丘規模(m)		周溝	埋葬施設					出土遺物				備考			
	直径	高さ		種類	長さ(単位m)*	幅(単位m)*	長軸方位	頭位	礎床	敷石	顔料	粘土枕		棺(石室)内	棺(石室)外ほか	
20	10.9×11.8	1~3	有	外護列石(石室入口), 周溝コ字形												
				横穴式石室(SK20-1)	6.52~6.58	0.78~1.22	N24° W	北北西-南南東	(南南東に開口)	○	○			須恵器(長頸壺ほか)	須恵器(大甕ほか)	仕切石
				箱式石棺(SK20-2)	0.85~0.88	0.3~0.35	N12° W	北北西-南南東	北北西					須恵器(壺・杯蓋)		周溝内(西)
21	13.0×14.7	1.4~2.96	有	箱式石棺(SK20-3)	(1.1)	(0.25~0.42)	N1° W	南北	北		○		須恵器(杯蓋・埴蓋)		墳丘外(北西)	
				箱式石棺(SK21-1)	1.67~1.73	0.24~0.45	N71° W	西北西-東南東	東南東	○	○	○	○	鉄器2(鉄斧・直刃鎌)	鉄器1(鉄鏃)	
22	9.9×11.9	0.96~2.1	有	箱式石棺(SK21-2)	-	-	N68° W	西北西-東南東	不明							
				箱式石棺(SK22-1)	1.96~1.98	0.35~0.53	N81° E	東西	東			○	○	鉄器1(用途不明製品)	鉄器(刀子・曲刃鎌)	
23	10.7×10.8	0.7~2.57	有	箱式石棺(SK22-2)	-	-	不明	不明	不明							
				箱式石棺(SK23-1)	1.61~1.64	0.22~0.53	N39° W	北西-南東	南東	○	○	○				
				箱式石棺(SK23-2)	0.50~0.52	0.14~0.17	N67° W	西北西-東南東	東南東							
				箱式石棺(SK23-3)	0.72	0.1~0.36	N85° W	東西	東							
				木蓋土坑(SK23-4)	1.7	0.43~0.56	N17° E	北北東-南南西	南南西?							蓋押さえ礫の存在。墳丘裾(北西)。
24	29.8×31.0	3.72~4.69	無	石蓋土坑(SK23-5)	0.81	0.18~0.23	N40° E	北東-南西	北東						墳丘裾(北西)	
				葺石, 円筒埴輪列, 埴裾列石, 埴頂部形象埴輪片の存在。												
				横穴式石室(SK24-1)	3.53	0.76~0.95	N64° E	東北東-西南西	東北東			○				
				箱式石棺(SK24-2)	3.15~3.23	0.72~0.86	N71° E	東北東-西南西	東北東	○		○		小型倭製鏡1		箱形木棺か。被覆礫。
				箱式石棺(SK24-3)	推定2	(0.53)	N57° E	東北東-西南西	東北東						鉄器22点(鉄鏃ほか)	
				箱式石棺(SK24-4)	0.61	0.21~0.23	N30° W	北北西-南南東	南南東						円筒埴輪片	側壁2段。板石間に埴輪片。
				箱式石棺(SK24-5)	0.48~0.5	0.12~0.17	N53° E	北東-南西	北東							墳丘裾(北西)
				石蓋土坑(SK24-6)	0.75	0.12~0.26	N53° W	北西-南東	南東							蓋石二重・側壁2段。墳丘裾(南)。
				木蓋土坑か(SK24-7)	0.61	0.26~0.30	N68° E	東北東-西南西	東北東							墳丘裾(南)
				石蓋土坑(SK24-8)	0.74	0.15~0.21	N61° W	西北西-東南東	不明							蓋石二重・側壁2段。墳丘裾(南)。
				石蓋土坑(SK24-9)	0.74	0.23~0.28	N61° W	西北西-東南東	不明							墳丘裾(南)
				石蓋土坑(SK24-10)	0.55	0.08~0.2	N18° E	北北東-南南西	北北東							墳丘裾(南)
箱式石棺(SK24-11)	0.49~0.50	0.17~0.18	N31° E	北北東-南南西	北北東							墳丘裾(南)				
石蓋土坑(SK24-12)	0.8	0.27~0.32	N69° W	西北西-東南東	東南東							木棺か。墳丘裾(南)。				
25	12×12.5	1.3~2.71	有	葺石												
				箱式石棺(SK25-1)	1.80~1.84	0.30~0.47	N65° W	西北西-東南東	東南東	○			○	鉄器1(直刃鎌)	鉄器1(直刃鎌)	
26	6.3×6.8	0.3~0.9	無	石蓋土坑(SK25-2)	0.9	0.26~0.38	N31° W	北北西-南南東	北北西?						葺石間の墳丘斜面	
				石蓋土坑(SK26-1)	0.73	0.23~0.32	N79° W	東西	西?							
31	墳丘なし	無?	無	石蓋土坑(SK26-2)	0.59	0.22~0.29	N84° W	東西	東?							
				横穴式石室	4.1~4.3	0.72~1.02	N78° W	西北西-東南東	(東南東に開口)	○				須恵器(杯蓋ほか)		棺台石
32	墳丘なし	無	無	横穴式石室	2.45	0.48~0.65	N21° W	北北西-南南東	(南南東に開口)	○	○		須恵器(杯蓋・杯身)		排水溝	

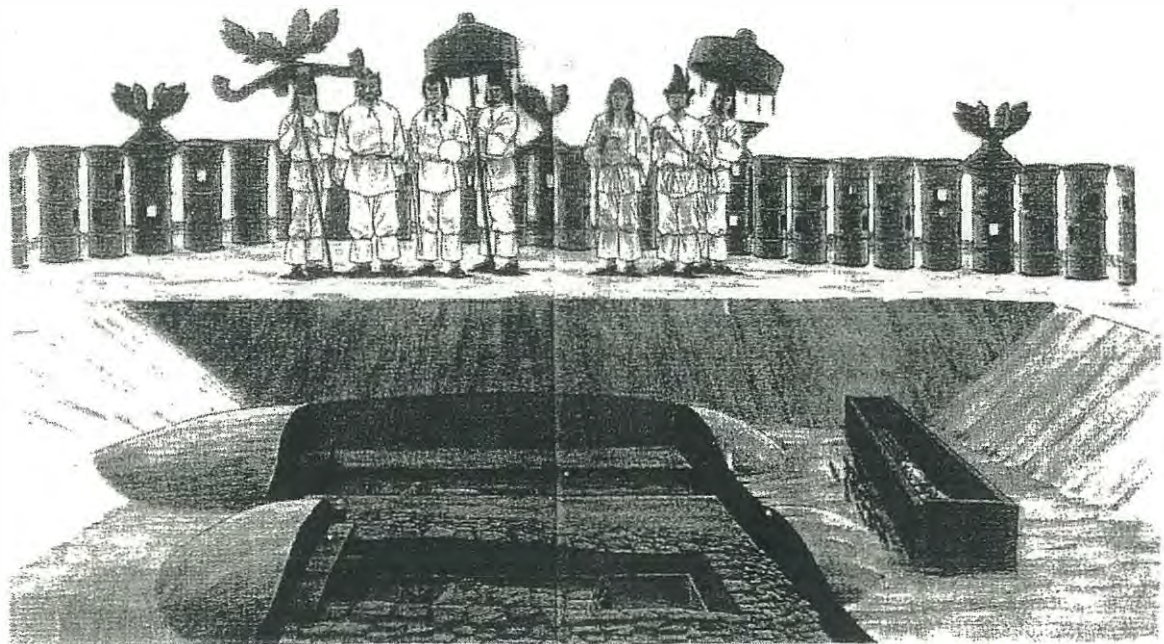
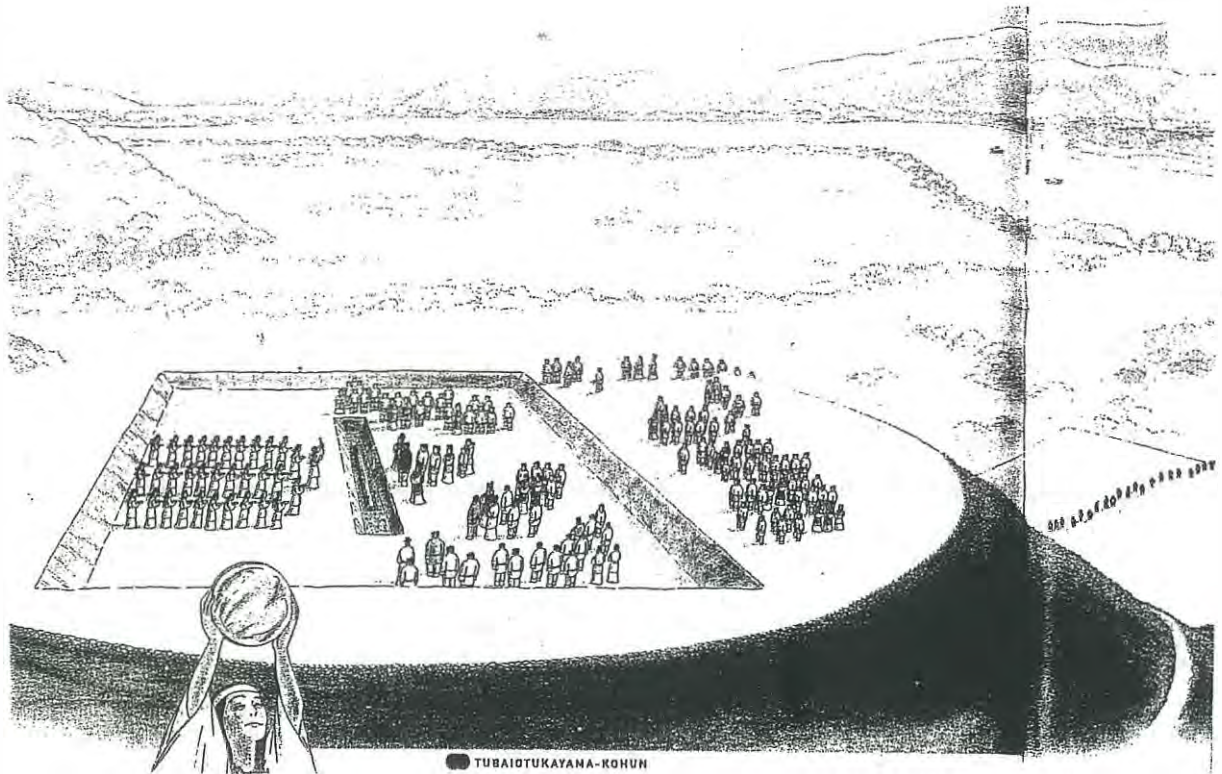
*長さ・幅=石棺・石室;内法, 石蓋土坑・木蓋土坑・土坑墓;墓坑(下段墓坑)の上端の規模。括弧内は現存値。



宮の本第24号古墳の墳丘模式図



宮の本第24号古墳の墳丘盛土模式図



古墳墳頂における葬送儀礼のようす(想像図)

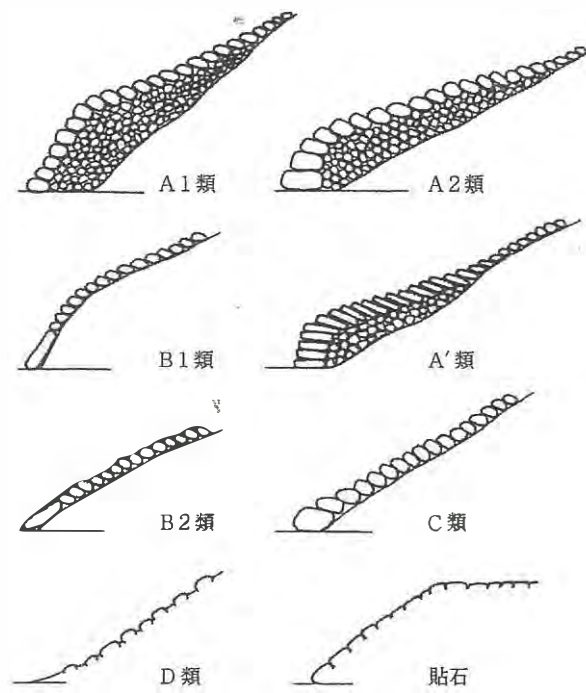
(上)京都府・椿井大塚山古墳

(金関恕監修 早川和子画『よみがえる日本の古代-旧石器～奈良時代の
日本がわかる復元画古代史-』小学館 2007年, 78～79頁

② 後円部中央に築かれた竪穴式石室(椿井大塚山古墳)より)

(下)岐阜県・昼飯大塚古墳

(中井正幸『昼飯大塚古墳-美濃最大の前方後円墳-』同成社 2007年,
108～109頁 図73より)

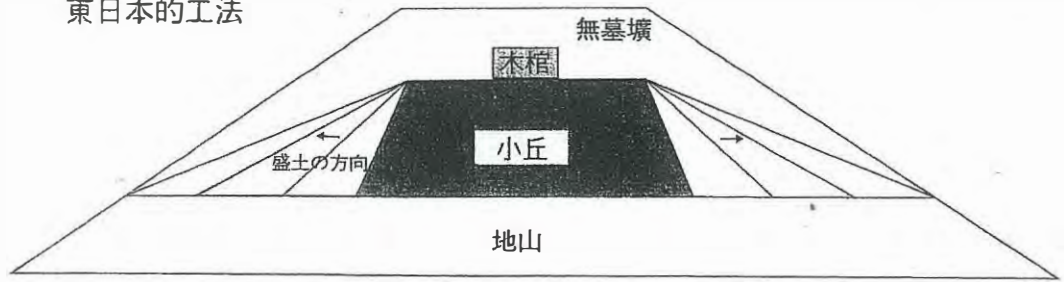


時期区分	集成編年	和田編年	A 1	A 2	A'	B 1	B 2	C
前期前葉	1	一	■			■		
前期中葉	2	二		■		■	⋮	
	3	三		⋮	■		■	■
前期後葉	4	四		⋮			■	■
中期初頭		五						■

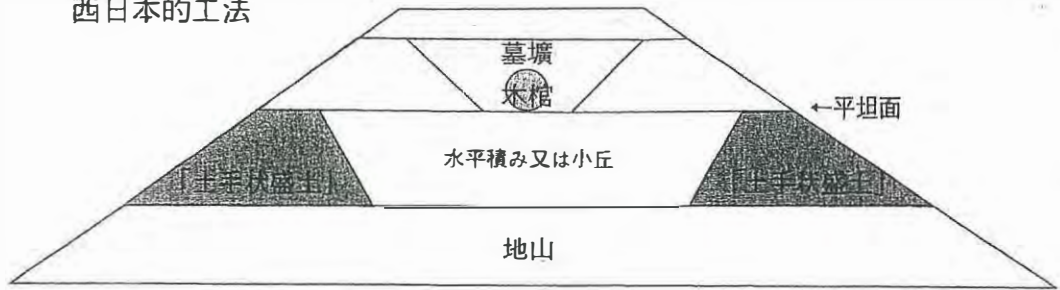
葺石の種類とその消長

(廣瀬覚「葺石と段築成」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』 同成社 2011年、6
頁図2、7頁表1を合成)

東日本的工法

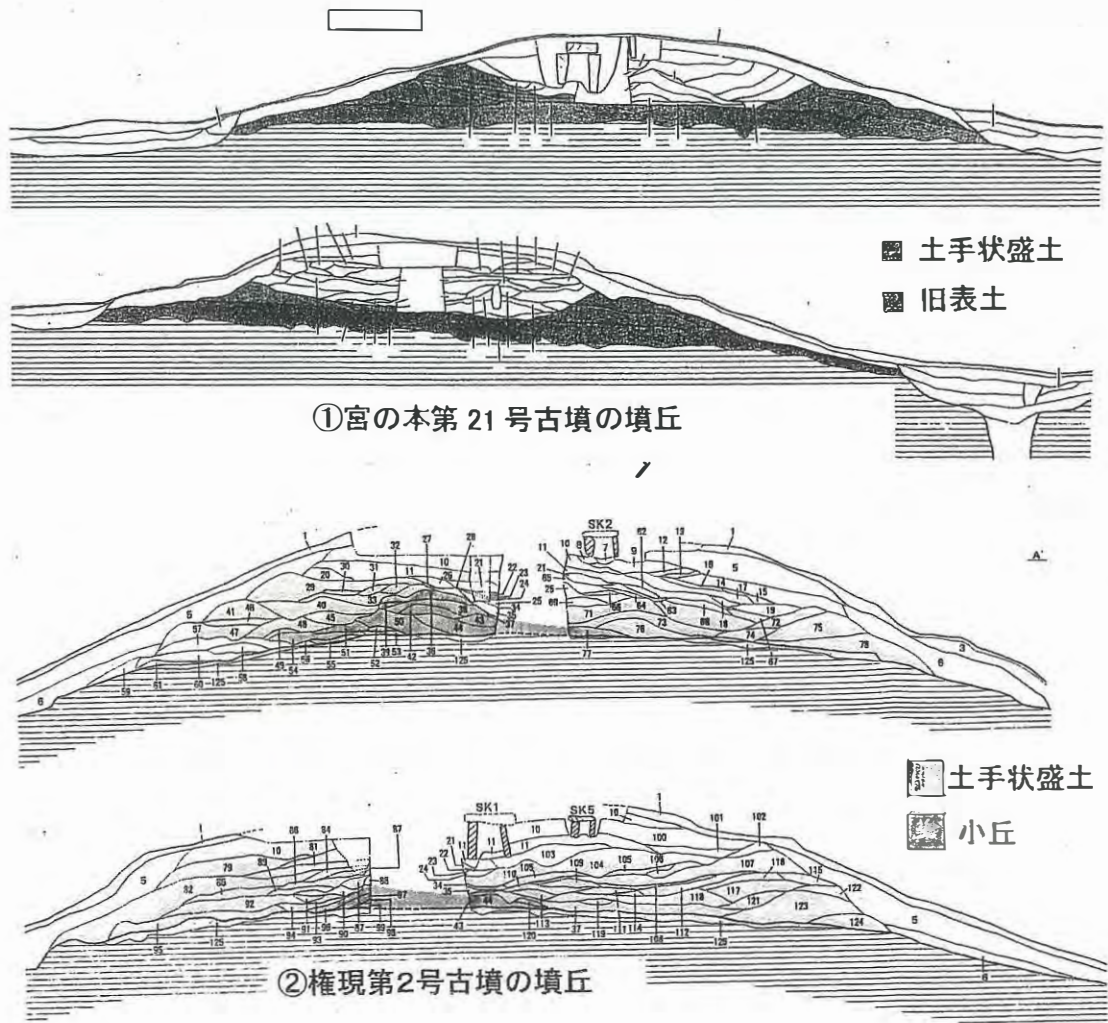


西日本的工法



墳丘構築法の模式図(青木敬『古墳築造の研究』

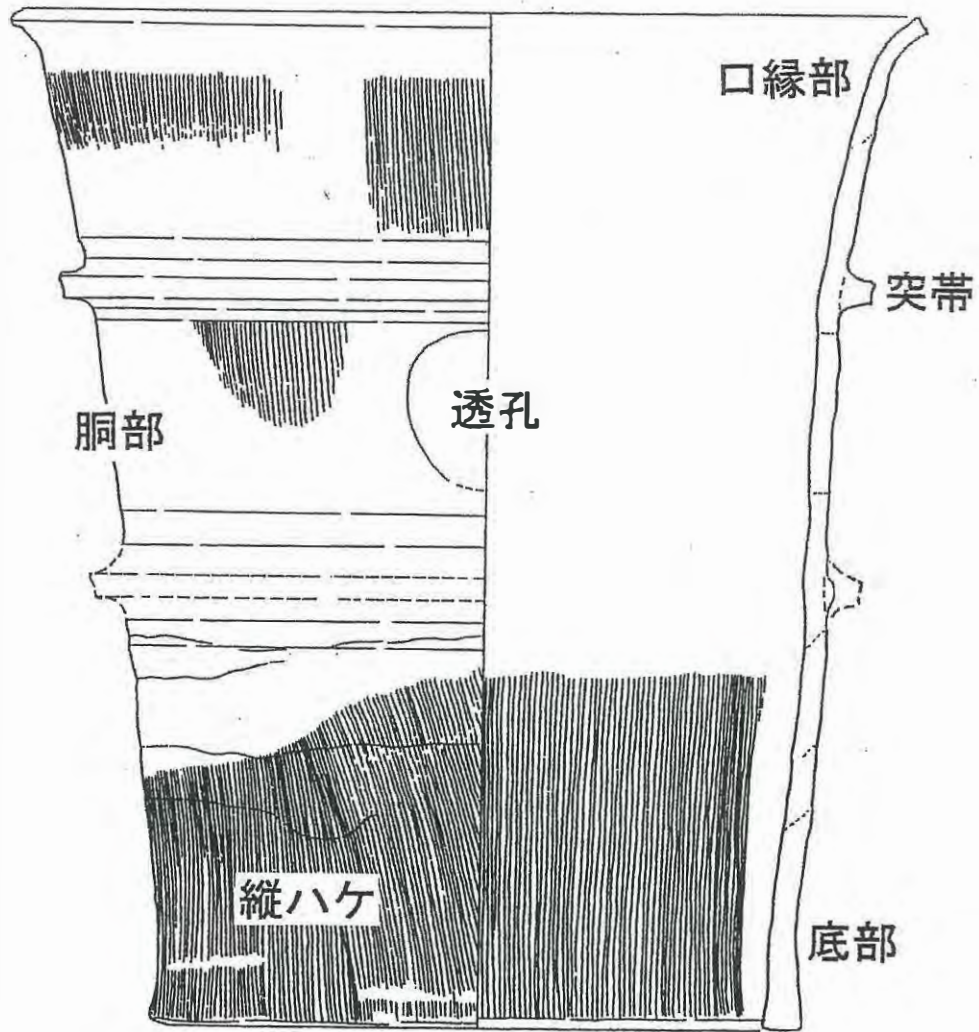
六一書房 2003年, 40頁 図13より)



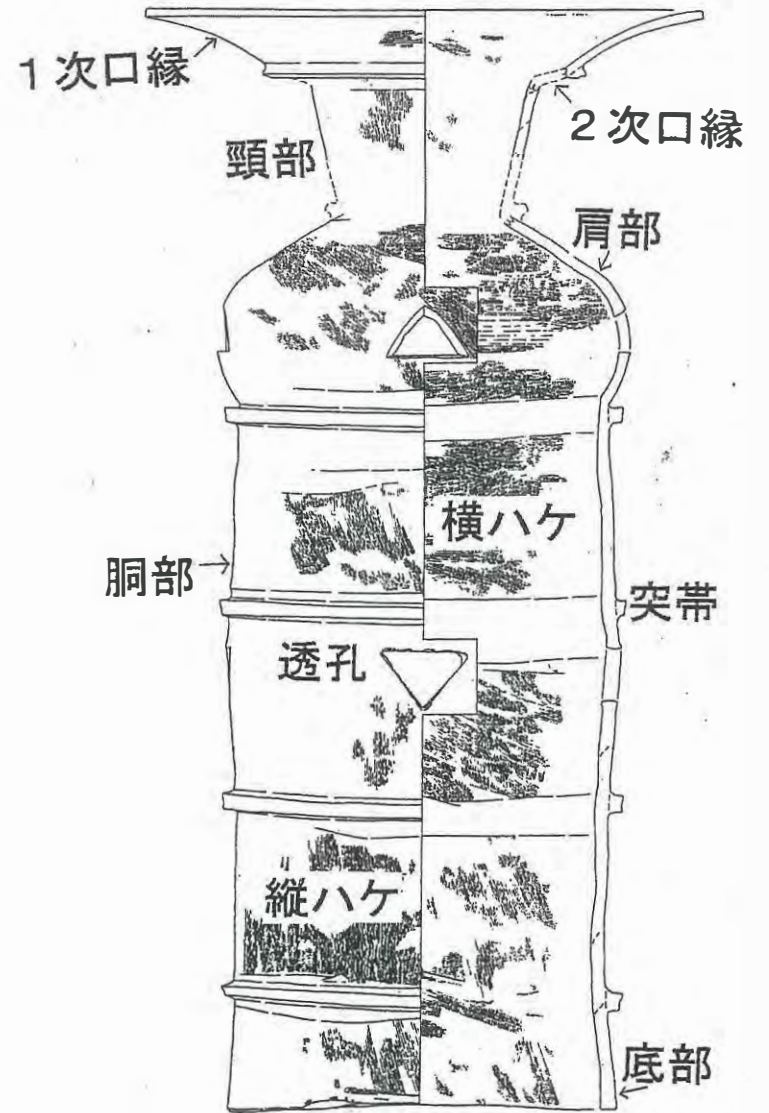
西日本的工法の県内例(1:120)

(上;第4表文献7, 下;文献9より)

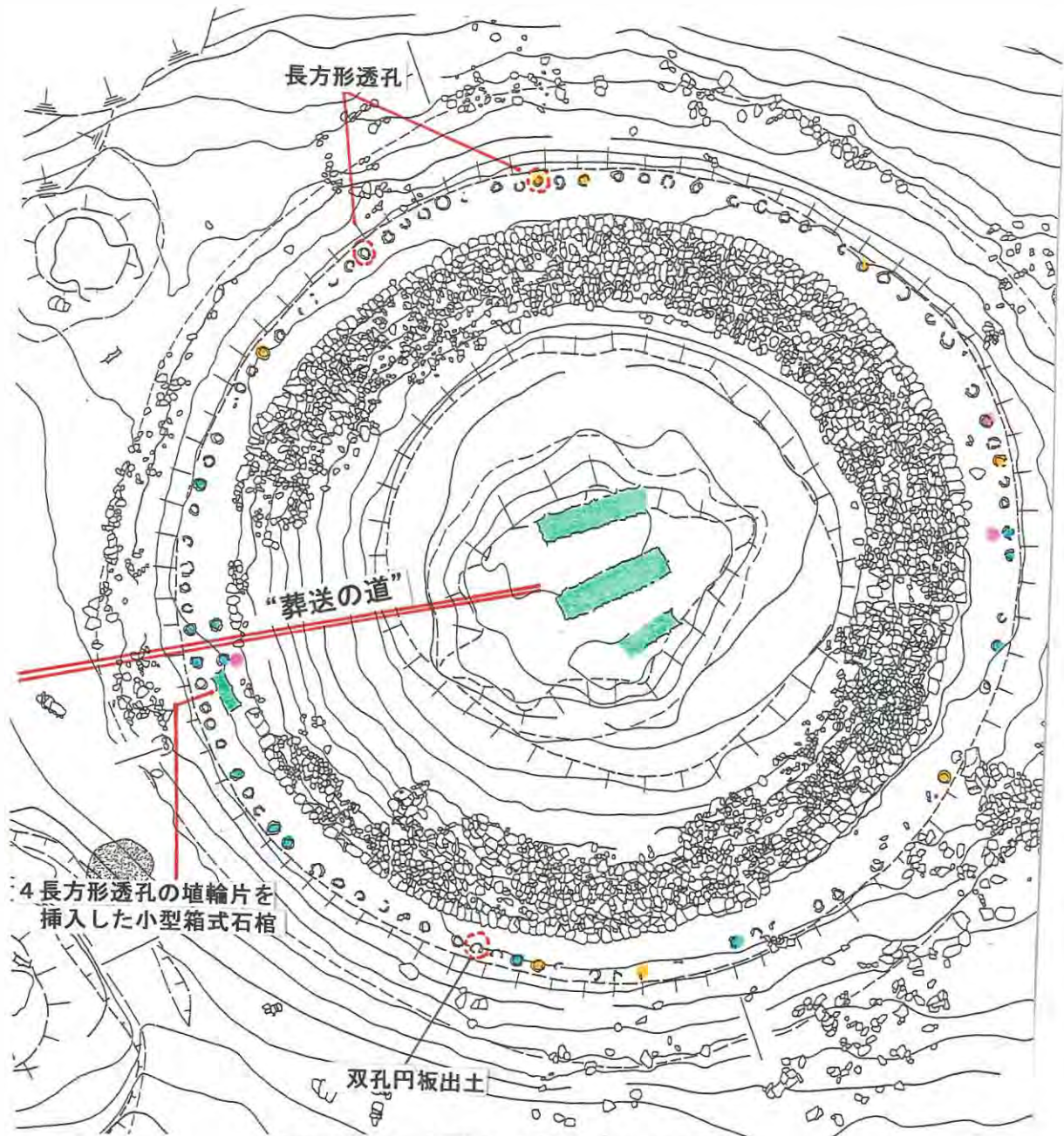
普通円筒埴輪の部分名称



朝顔形円筒埴輪の部分名称

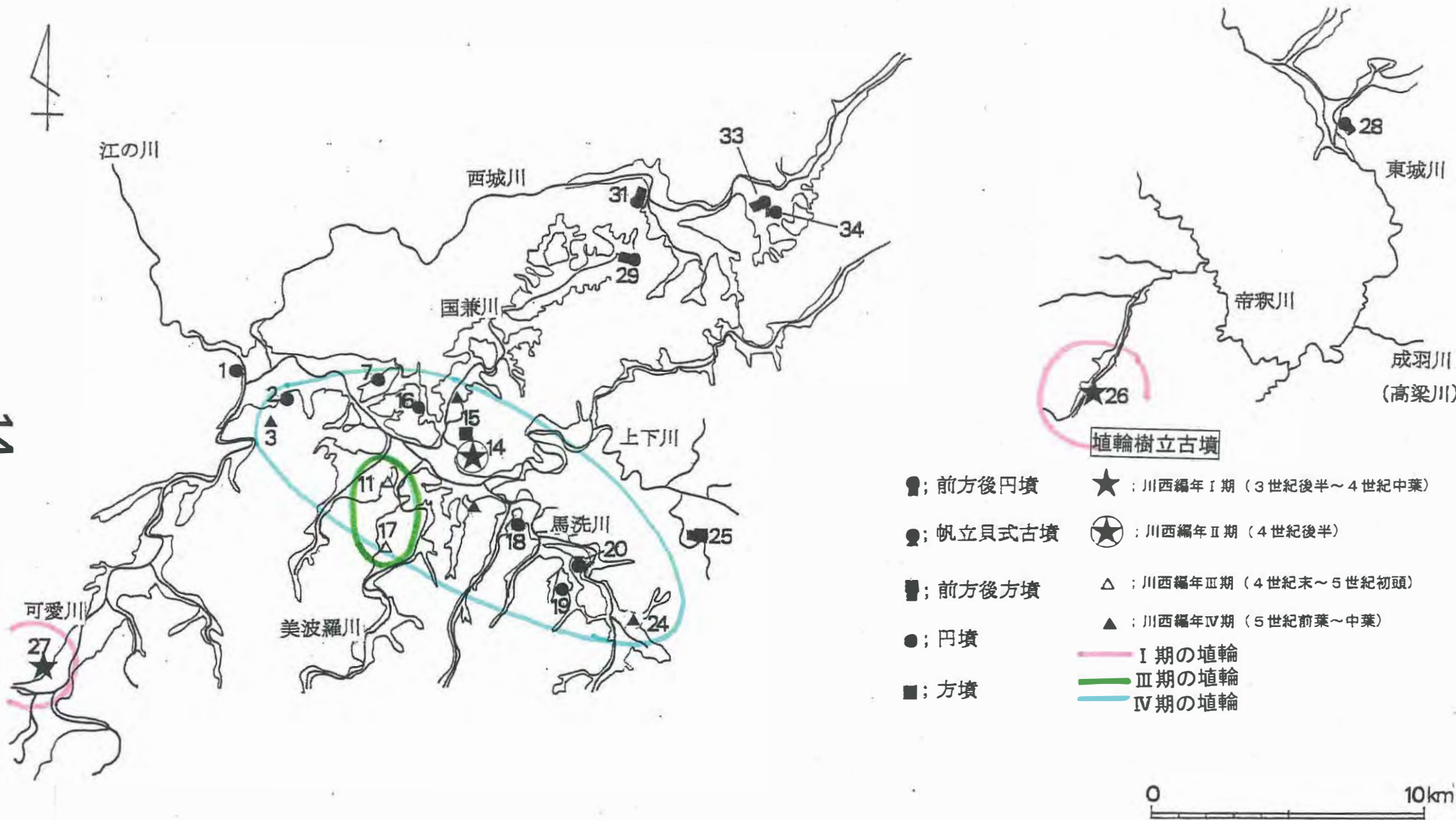


(大阪市立大学日本史研究室『玉手山1号墳の研究』
2010年, 91頁・図37)



宮の本第 24 号古墳の埴輪列と葺石

- ; 朝顔形円筒埴輪
- ; 朝顔形円筒埴輪の
可能性があるもの
- ; 橙褐色・暗褐色の埴輪
- ; 埋葬施設



県北 (三次・庄原市域) の壙輪樹立古墳の広がり (1:20万)

文献表

No.	文献名
1	広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会『広島県双三郡三次市史料総覧』第5篇 1974年
2	三次市史編集委員会『三次市史』Ⅱ 2004年
3	広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』 1983年
4	本村豪章「備後三次市太郎丸古墳調査報告」『古代吉備』第4集 1961年
5	植田千佳穂「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群測量調査報告」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第4集 広島県立歴史民俗資料館 2003年
6	松崎寿和・潮見浩「広島県三次市神杉常楽寺古墳群調査概報」『広島大学文学部紀要』6 1954年
7	財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(29) 宮の本第20～26・31・32号古墳』 2013年(近刊)
8	財団法人広島県教育事業団 広島県立歴史民俗資料館『中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る三次地域埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 2007年
9	財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 権現第1～3号古墳』 2010年
10	河瀬正利「糸井大塚古墳」脇坂光彦・小都隆企画・編集『探訪・広島のお古墳』 芸備友の会 1991年
11	加藤光臣「稲荷山D-16号古墳の測量報告-三次市教育委員会・三次地方史研究会・広島県立歴史民俗資料館の合同調査-」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第8集 広島県立歴史民俗資料館 2011年
12	財団法人広島県教育事業団 広島県立歴史民俗資料館『中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地域埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 2008年
13	高田明人・山崎やよい「双三郡吉舎町八幡山古墳測量雑感」『続トレンチ』第3巻第1号 続トレンチ編集委員会 1979年
14	広島県双三郡吉舎町教育委員会『三玉大塚-調査と整備-』 1983年
15	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(Ⅰ) 1994年
16	広島県神石町教育委員会 広島大学文学部考古学研究室『辰の口古墳』 1995年
17	川尻真『甲立古墳から考える古墳時代の広島』(ひろしま考古学講座資料) 財団法人広島県教育事業団 2012年
18	広島県東城町教育委員会 広島大学文学部考古学研究室『大迫山第1号古墳発掘調査概報』 1989年
19	田又仁美・吉本由紀「庄原市甲山古墳測量実習, 無事?! 終了」『続トレンチ』第4巻第1号 続トレンチ編集委員会 1980年
20	広島県教育委員会『広島県遺跡地図XI(三次市・庄原市)』 2006年
21	広島大学文学部考古学研究室『旧寺古墳群測量報告』 1983年
22	河瀬正利「糸井大塚古墳」脇坂光彦・小都隆企画・編集『探訪・広島のお古墳』 芸備友の会 1991年
23	測量実習参加学生一同「広政古墳群測量実習について」『続トレンチ』第6巻第1号 続トレンチ編集委員会 1982年

広島県北の主な前・中期大型古墳(三次・庄原市中心)

No.	文献	所在地①	所在地②	古墳名	墳形	墳丘規模(単位m)			中心埋葬施設	従属葬	発掘調査	時期	墳丘築成	墓石	埴輪列	周溝	形象埴輪	副葬遺物
						径・全長	(後円部径)	高さ										
1	1・2	三次市	粟屋町	岩屋第1号古墳	円	径30		4.5	①堅穴式石室(長さ2.4m)	墳頂=箱式石棺4・石蓋土坑1	○	4c						
2	1・2	三次市	十日市町	若宮古墳	前方後円	全長37.4	22.7	3				前期か	○					
3	3	三次市	西酒屋町	酒屋高塚古墳	帆立貝	全長(推定)46	34	7	①堅穴式石室(長さ推定3.6m) ②堅穴式石室(長さ2.72m)		○	5c後半	二段築成	○	○か			①堅穴式石室=(画文帯神獸鏡)・鉄・鉄斧・鉄先・刀子 ②堅穴式石室=剣・勾玉・小玉
4	1・2	三次市	西酒屋町	善法寺第8号古墳	帆立貝	全長30	21	3.5	①堅穴式石室(長さ3m)②箱式石棺(半壊)	前方部中央=箱式石棺1	○	中期前半		○				①堅穴式石室=剣・刀・鉄斧・従属葬=剣・鉄
5	1・2	三次市	西酒屋町	善法寺第9号古墳	前方後円	全長35	14	3.5	①堅穴式石室(長さ2m)②箱式石棺(長さ1.8m)	前方部=堅穴式石室(長さ1.7m)・箱式石棺2	○	中期前半						①堅穴式石室=小型鏡・剣・鉄斧・鉄、従属葬=小型鏡・鉄・鉄先
6	1・2	三次市	西酒屋町	善法寺第11号古墳	前方後方	全長34	後方部長さ18	3	土坑(木棺)=長さ2.7m	前方部=箱式石棺2	○	中期前半						土坑(木棺)=剣・刀・鉄・鉄斧・鉄、従属葬=刀子・鉄斧
7	4	三次市	四拾貫町	四拾貫太郎丸第2号古墳	円	径26.6		4	堅穴式石室(半壊)		○	前期か		○				変形文鏡、刀、剣、鉄、刀子、鉄
8	1・2	三次市	四拾貫町	四拾貫太郎丸第20号古墳	円	径32												
9	1・2	三次市	四拾貫町	四拾貫太郎丸第32号古墳	前方後円	全長38	径30											
10	5・6	三次市	高杉町	浄楽寺第1号古墳	帆立貝	全長27.9	径23.5	3	箱式石棺か		○		二段築成	○		○		
11	5・6	三次市	高杉町	浄楽寺第12号古墳	円	径45.8		6.1	粘土槨2		○	5c中頃	二段築成	○	○	○	○	
12	5・6	三次市	高杉町	浄楽寺第37号古墳	円	径29.5		4.3	箱式石棺		○		二段築成	○		○		
13	5・6	三次市	高杉町	浄楽寺第81号古墳	方	一辺19.0		2.7	箱式石棺		○			○		○		
14	7	三次市	向江田町	宮の本第24号古墳	円	径29.8×31.0		3.72~4.69	①堅穴式石室(長さ3.53m) ②箱式石棺(長さ3.15~3.23m) ③箱式石棺(半壊)	墳丘=小型箱式石棺1、墳裾=小型箱式石棺2、木蓋土坑1、石蓋土坑5	○	4c末~5c初頭	三段築成	○	○	×	○	②箱式石棺=小型鏡 ③箱式石棺=剣片・鉄片
15	8	三次市	向江田町	箱山第5号古墳	方	一辺13.7×14.0		2.2~2.5	①箱式石棺②箱式石棺	墳頂=石蓋土坑1、墳裾=小型箱式石棺1、石蓋土坑2	○	5c	二段築成	○		×		①箱式石棺=鉄・鉄・堅楯
16	9	三次市	向江田町	権現第2号古墳		径20		3	①箱式石棺(長さ1.78m) ②箱式石棺(長さ1.64m+) ③箱式石棺(長さ1.6m+) ④箱式石棺(長さ1.5m)	墳頂=小型箱式石棺1	○	(4c後葉~) 5c前半				×		①箱式石棺=直刀・管玉・白玉 ④箱式石棺=刀子・勾玉・管玉
17	10	三次市	糸井町	糸井大塚古墳(糸井塚の本第1号古墳)	帆立貝	全長65	56	8~10				中期前半	二段築成	○	○か	○		
18	11	三次市	三良坂町	稲荷山D-第18号古墳	円	径36×38		4.2~7				5c後半(やや新相)	三段築成	○		○		
19	12	三次市	吉舎町	下矢井南第4号古墳	円	径17.5×18.8		2~3.8	①粘土槨(割竹形木棺) ②粘土槨(割竹形木棺) ③粘土槨(割竹形木棺) ④土坑(割竹形木棺)	墳裾=土坑(割竹形木棺)	○	4c末~5c初頭	二段築成			○		①粘土槨=刀子・堅楯、 ②粘土槨=刀子・鉄剣、 ③粘土槨=鉄鏡・鉄斧・刀子・鉄剣・堅楯、④土坑=堅楯
20	13	三次市	吉舎町	八幡山第1号古墳	帆立貝	全長45	40	8				5c後半か		○か	○			
21	1	三次市	吉舎町	八幡山第24号古墳	前方後円	全長48	39.5								○			
22	1	三次市	吉舎町	海田原第20号古墳	前方後円	全長40	29								○			
23	1	三次市	吉舎町	海田原第29号古墳	前方後円	全長33	26								○			
24	14	三次市	吉舎町	三五大塚古墳(三五第1号古墳)	帆立貝	全長41	33.3	7.9	堅穴式石室(半壊)		○	5c後半	三段築成	○	○か	○	○	珠文鏡・変形文鏡・筒形銅器・鉄鉢・短甲・磁石ほか
25	15	三次市	吉舎町	寺津第3号古墳	前方後方	全長35~40	後方部長さ20	3+		前方部墳頂=粘土槨1・箱式石棺1・石蓋土坑1	△	5c後半~6c初頭						
26	16	神石高原町	高光	辰の口古墳	前方後円	全長77	36×41	7.3	堅穴式石室(長さ6.7m、箱形木棺)	<びれ部墳裾=埴輪棺1	○	4c後半	三段築成	○	△(墳頂)			堅穴式石室=管玉
27	17	安芸高田市	甲田町	甲立古墳	前方後円	全長75		13			△	4c後半	二段築成	○	○	○		
28	18	庄原市	東城町	大迫山第1号古墳	前方後円	全長45.5	25	5	堅穴式石室(長さ5.14m、箱形木棺か)		○	4c中葉	三段築成	○		背面溝		獣首鏡・勾玉・管玉・小玉
29	19	庄原市	上原町	甲山古墳	前方後円	全長59	37.4	7.7										
30	20	庄原市	本郷町	諏訪第1号古墳	帆立貝	全長29.8	20	3.5	箱式石棺2・配石土坑2		○							
31	21	庄原市	掛田町	旧寺第1号古墳	前方後円	全長61.7	39.3	6.5	堅穴式石室か	前方部=堅穴式石室or箱式石棺か		5c中~後半	二段築成	○	○	○		
32	22	庄原市	本町	瓢山古墳	前方後円	全長41	26	4				前半		○	○			
33	23	庄原市	宮内町	矢崎古墳	前方後円	全長56	33	6.2				中期~後期初頭	二段築成		○か			
34	23	庄原市	小用町	広政第2号古墳	帆立貝	全長48	35	6				中期~後期初頭						

宮の本第20~26・31・32号古墳における墓制の変遷

《宮の本古墳群》

《日本の出来事》

17	3世紀			244~	この頃、卑弥呼死す
	4世紀	300年	木棺墓SK2 (始祖墓)	246年	箸墓古墳(卑弥呼の墓?)の築造
	5世紀	400年	大型円墳 (第24号古墳)	369年	百済から七支刀おくれる。
	6世紀	500年	小円墳の築造(箱式石棺) (25→23→21→22)	5世紀初	高句麗の南下による伽耶地域からの 難民が日本に渡来する。
	7世紀	600年	(集団の墓はどこ?)	421~479 年頃	倭の五王(讃・珍・興・濟・武) = 中国南朝への遣使
	8世紀	700年	横穴式石室墳の築造・追葬 (20→32→31)	5世紀後葉~6世紀	伽耶地域が新羅に滅ぼされ、百済との交流盛ん
				祖廟SB2・3の建設 (祖廟祭祀の継続)	
			祖廟SB2・3の荒廃		